

旅の思ひ出

(3)

藤澤義夫

九州路とくろ処(上)

天の岩戸から宮崎神宮へ

昭和六年蘆溝橋事件(満洲)が勃発して翌年上海に飛火すると言う困難な事変は、昭和十二年には日華事変と拡大し、宣戦布告のないまま予備、後備、補充兵が次々と隠密の中に召集され出動するという陰惨な空気の中に迎えた昭和十五年は、当時使われていた所謂皇紀で丁度二千六百年、そこで政府は国民精神作興、国威発揚を旗印に全国的に皇紀二千六百年奉祝式典を挙行した。

この年私は会社の監査役に同行して九州所在の支店を廻った機会を利用して、我が国発祥の地と言われる日向の高千穂、高天ヶ原、天の岩戸及び宮崎神宮にお参りした。前日宿につき翌朝二階から外を見ると、初めて見る雲海の上に乗りに二、三の峯が美しく浮き出ている。女中さんに尋ねると右端の一番高い峯が高千穂の峯だと教えてくれた。成る程ナーアノ峯が天孫降臨の峯かと神話の神秘に打

たれた。宿を出て(宿泊料一円五十銭)田圃道を行く内左手の山が迫った処で道の左側に石柱の柵に囲まれた境内があり、そこが高天ヶ原、古びた祠と社前に一本の木そして左手に迫った山の斜面の目の高さに樹葉の間に見える僅かの空間、この奥が天の岩戸と言うことだった。或る日天照皇大神が突然御機嫌を損じ天の岩戸の中にお姿を御隠しになった。そこで八百万の神々がお集りになり、アメノウズメノ命が賑やかな歌声に合わせ踊りを舞われた騒動しさに気をひかれた皇大神が岩戸を少し開いて外の様子をお覗きになった処を強力のアメノタヂカラオノ命が岩戸を押し開き皇大神を外に同伴れ出し申したという神話の舞台をこの目で見た。

現在議論になっている耶馬台国の女王卑弥呼は即天照皇大神その人ではなからうか、卑弥呼の子孫神武天皇は日向から豊後、安芸、吉備へと次々に統一して大和朝廷を建設した。天の岩戸を見た後、名勝高千穂

峡に沿って延岡に下り宮崎神宮に向う途中に御即位前の神武天皇が大和に東征なさった時の舟出の港と言われる美々津の浜を通る。

宮崎に着いて宮崎神宮に参拝社前に額突いて皇国の長久を祈願。広いひらけた境内にはこの式典を記念して建てられた「八紘一字」の大きな塔が一際目に立つ、この塔は日豊線の窓からも良く見える。ここまで来たからにはハネムーンのメッカ青島や鶴戸神宮(神武天皇の父ウガヤフキアエズノ命が祀つてある)にもお参りしたかったが、日程の都合で割愛確か大淀と言った川のホトリに一泊次へ向ふ。

青の洞門、耶馬溪、羅漢寺

川岸まで突出した山、山のこちらから向うの村までの往来は時間をかけた山越えしかなかった。そこを禪海が二百余年の昔ツツヤノミでコツ／＼と三十余年の歳月をかけて一人で切り開いたと言う「青の洞門」そのお蔭でこのトンネルは僅か数分で通り抜けが出来た。大きな人助けをした禪海の労苦を偲ぶ。

禪海とは如何なる人物か、巷説によると人を殺めた犯人が犯した罪をつぐない、人助けの為に人目

神事奇祭の研究

柳田義一

わが国には多数の神事が昔のままの姿でのこされて来ているが、何の為にそんな行事があるかというところ不可解のようである。例えば各地に残る「性的祭」などは農作物の祈願であったものが下の病だとか、縁結びだとか、安産祈願に変化しているものが多い。

(一)、三河国、西尾町在に熱池八幡宮がある。この祭——テンテコ祭り(一月三日)は厄年の青年三人赤い衣を着て顔も赤袋で包み目鼻だけ出し、いづれもお尻の上に大根で作った「リング」を腰にくくりつけ、一人は締太鼓、一人は飯櫃、一人は笹をかつきこれに絵と酒樽を吊り下げ、その後には



箒持三人、神官、総代らに加わって太鼓の拍子に合して腰を動かし神社拝殿前を三周すると箒箒持つ三人は用意してあつた藁灰の山をこの箒でかき廻し境内を灰だらけにする。一同拝殿に座り組長は、「千秋万歳」の舞をなし松を投げ込み、田植歌を唄って終る。

(二)、又尾張の久保一色にある田県神社の祭礼(旧一月十五日)には三尺大の木製リングに藁人形を跨がせ、これを輿に入れ、リングをかいた大轆を先頭に立てて女神の田県社へ婿入りとして繰り込む。その後から神の太木を立てたまままで持ち込む、これが神社へ入るや、たちまち打ち倒して、この枝葉をむしりとり樹に巻いてある神札の奪い合いがものすごく演じられるが、これが田の水口に挿すと稲がよく実るといわれる。

(三)、大和三輪の近く纏向村の素盞男祠の前では旧一月十日に藁製の一間ばかりの大きいリングを大西では同じくヨニーを作り共に昇いでこの祠の前で合し、それを祠

余談はこゝらで耶馬溪の魅力は何と言つても美しい森林と奇岩、怪石の深い渓谷と清冽な瀧との織りなす自然の景観ではなからうか。羅漢寺は五百羅漢の石像で有名、草木の中にズラリと並んだ五百体夫々の表情は異り異様の感に打たれる。五百羅漢では武州川越の喜多院無量寺の羅漢が並び称されるがここは平地に余り整然と並んで居て野趣に乏しい感がする。いづれにしても四十年以上前の思ひ出であるから今日では随分様変わったのでないかと思う。

偶感

藤沢義夫

「たつみ」三十二号に珍らしい維新の志士の写真が掲載されてありましたが中に大隈侯の二十八才当時の姿を見出し、興味を覚えましたので、侯の創建になる母校の「大学史編集所」事務長に見せました処、そこには既にこの写真の拡大されたものが保存されて有りましたが、その時事務長から西郷さんの写真はこれ以外には無く、上野公園と鹿児島島の街頭に建っている銅像はいづれも想像制作だろうという事でしたが果してどんなものでしょう。

若しもこの写真が西郷さんの生前の唯一の写真であるとすれば、会員瀬脇文寿さんの夫人が西郷さんのお孫さんだと聞いて居るので夫人はこの写真を見て、さぞかしお喜び且感慨一方ならぬものがあっただろうと御推察申上げる次第です。尚西郷さんは若き日どんな事情があつてか詳しくは知りませんが僧月照と手を取って錦江湾に身を投げ西郷さんだけが生き残られたという事ですが、その西郷さんも西南の役で無念の自刃をなされ、運命の奇奇に思いを馳せる次第です。

鈴木よね刀自

近代日本の女性史に:

東京集英社より「近代日本の女性史」十二巻が発行されつつあるが、その中の第六巻に「事業の理想と情熱」の巻に、当事松蔭女学校荒井とみよさんが「鈴木よね刀自」を上梓された。事業は女だけのものではない。強靱な負けず魂と大胆な決断力で貿易の鈴木王国を築いた女性経済の哲学を見ると、彼女は言っている。